

母子保健に関する教育体系の検討

研究協力者 山下文雄¹⁾
共同研究者 吉村 皓子²⁾, 山岡 浩一³⁾, 松本 寿通⁴⁾, 満留 昭久⁵⁾
藤井 充⁶⁾, 原 逸男⁷⁾, 村本 静子⁶⁾, 西岡 和男⁸⁾
栗谷 典量¹⁾
協力研究者 片淵 幸彦¹⁾, 寺澤 健二郎¹⁾, 山下 裕史朗¹⁾
安藤 寛¹⁾, 大谷 靖世¹⁾

- 要約： 1. 指導者用教育教材として「乳幼児健診の実際」のビデオを制作した
2. 地域適合性のある教育システムの提言
3. 教育システムを確立するための勧告

見出し語：指導者教育用ビデオ・母子保健教育システム・栄養指導アンケート調査

一般的に母子保健は、その国の社会的影響を強く受けると言われているが、我が国の母子保健事情も医学の進歩及び生活環境や食生活の変化など、社会的変化により大きく変容してきた。しかし母が子を「産み・育てる」と言う人類としての行為は、いかなる時代にも永々として営まれてきた行為であり、社会の中でこれ程多くの人がその行為に関わり、関心を持って援助してきた“人間としての大事業”はないと言っても過言ではないであろう。

従来子を産み育てる術（すべ）は基本的には母から娘（嫁）へ、育児経験者から未経験者へ伝承されてきたものであったが、近年、社会構造・家族構造・価値観の変化など複雑な社会変

貌が、人間としての必要な営みを希薄にしているのではないかと考えられる子どもたちの姿が見られるようになってきた。今後、わが国は高齢社会を迎える。今こそ、国としての母子保健の教育システムの確立が急務とされる時のように思われる。

この度の3年間の研究では、地域の母子保健活動の最前線である市町村保健婦や保健所の保健婦、栄養士、医師に焦点をあてその教育システムの在り方について研究を重ねてきた。まず昭和61・62年度で全国の保健所や市町村の小児保健指導者の研修の実態を調査し報告した。

今年度は視聴覚教育教材（ビデオテープ）を開発し地域適合性のある教育システムづくりを検討

久留米大学医学部¹⁾, 福岡県朝倉保健所²⁾, 北九州市小児科医会³⁾, 福岡市小児科医会⁴⁾
福岡大学医学部⁵⁾, 福岡県衛生部⁶⁾, 大牟田市保健所⁷⁾, 福岡市衛生局⁸⁾

原 = 子 子 子

・提言をした。

I 福岡県におけるアンケート調査：

福岡県の県立保健所は21ヶ所で各々1人ずつ21人の栄養士が配置されている。昭和63年12月現在でアンケートをだし、20人の栄養士から回答をもらった。

A) 過去2年間に母子保健に関する研修を受けたことがあるか。

◆ある 10人(50%)

◇ない 10人(50%)

受講出来なかった理由：知らなかった3人
忙しくて行けなかった7人

B) 保健所保健婦と母子保健指導について研究会や知識の交流会をしたことがあるか。

◆ある 9人(45%)

◇ない 11人(55%)

C) 管内市町村保健婦と母子保健指導について研究会や知識の交流会をもったことがあるか。

◆ある 6人(30%)

◇ない 14人(70%)

D) 乳幼児健診に従事する医師や医師会の小児科医師と保健指導や知識の交流会をもったことがあるか。

◆ある 2人(10%)

◇ない 18人(90%)

E) こどもの栄養指導で困っていることや問題点。

◆指導内容の統一ができていない。母

乳の与え方、断乳の時期、牛乳の与え方など医師、保健婦、助産婦、栄養士でそれぞれに考え方に少しずつ差がある。スタッフ間の調整・研修が必要(3人15%)。

◆様々な症例に出会った場合、経験に乏しく指導に自信が持てない。(20歳代の栄養士 6人中5人80%)

◆栄養指導を受けに来た母親で、発達や日常生活の指導が必要な母親が多い。栄養士も乳幼児の生活指導が出来るようにこどもの発達や育児指導についての教育を受けることが必要(8人40%)。

◆現代の若い母親は、出産前にこどもに接する機会が少なく自分のこどもしか知らない。育児の常識に乏しく指導のポイントの把握が難しい。

◆現代は母親の食生活や栄養の知識が個々に異なるため、一人ずつ指導内容を変えなければならない。資料の多様性が求められる。

◆アレルギー性疾患と食べ物について指導が統一されていない。医師、保健婦、栄養士の指導の統一をはかってほしい(10人50%)。

◆食生活に問題があるこどものフォローが行われていない。

◆指導用マニュアルがない。

F) 今後期待する研修は

◆アレルギー(10人50%)

◆発達・しつけ(5人25%)

◆現代における栄養指導のありかた

(7人35%)

◆乳幼児健診に従事するスタッフの合同研修(3人15%)

◆肥満児, 周産期医学, 母乳, 感染症, 循環器疾患, こどもの心理・虫歯と食事

◎考察: このアンケート調査はあくまでも福岡県の場合であって, すべてを代弁しているとはいえないが, 乳幼児の保健指導者についていくつかの問題が提起されている。

1. 乳幼児健診スタッフの連携が悪くなっている。最近はこどもや家庭が持つ問題が多様化し, 個々についての共通性が乏しくなっている。かつて栄養失調や伝染病などの疾病が多かったころは, 問題解決のためには指導スタッフの連携が非常に大切であったし, 互いに共通の目標があった。今はその大きな目標がなくなり, 乳幼児の保健活動にかかわる医師, 保健所内スタッフ, 市町村保健婦などの互いの連携が取れにくくなっている。

2. 育児相談をうける若い栄養士自身にも(恐らく若い保健婦の場合も同様のことが言えるだろう), 育った生活環境の中で, こどもに接する機会が少なく, 生育過程で育児の基本的常識を獲得していない。

3. 現在の乳幼児健診における栄養指導は, 離乳食の指導にかろうじてとどまっており, 個々の問題への取り組みができていない。

4. 乳幼児健診における栄養指導の在り方を

見直す時期に来ている。

II 小児保健教育促進のための視聴覚教材ビデオテープ「乳幼児健診の実際」の試作。

福岡市小児科医会作成のテキスト「乳幼児健診の手引」の視聴覚版として, ビデオ「乳幼児健診の実際」を制作した。このビデオはいろいろな使い方が出来る。例えば指導者の自習, グループでの discussion, 医学部学生, 看護学生, 保育園保母などにも使える。

III 小児保健指導従事者の教育システムについて

医学の急速な変化と現代の家庭がもつ問題の多様性に対応し, 適切な保健指導を行っていくために, 指導する立場にある者は生涯, 研修に務めるよう努力しなければならない。今後ウルトラ級に高齢化が進み, 高齢者対策に多くのエネルギーが費やされることになる我が国で, いかにして効率良く母子保健指導従事者の教育を行っていくか, いわゆる教育システム化(目的・方法・評価)の確立が重要である。

(1) 保健所単位で行える教育システム

i) 新卒者の教育(市町村および保健所保健婦・栄養士)

保健所のスタッフで教育プログラムを組み, 一定期間現場での教育を行う。新卒者は育児経験に乏しいことが多く, 教科書的な知識しかもっていない。こどもを触れさせながら育児の基本を体験させ, 保健指導のポイントを理解させることが望ましい。

◆こどもの発達を乳幼児健診の現場で観察

させながら教える。

- ◆ 離乳食の調理実習を行う。
- ◆ 事例検討会を頻回に行い、応用問題に対する対応能力をつける。

ii) 市町村保健婦、保健所保健婦、栄養士、健診医師、専門医師その他乳幼児保健にかかわりを持つ人（保母など）を交えての研修会や話し合い。

iii) 保健所管内地域医師会と連絡会を実施し、地域の情報交換を行う。

(2) 都道府県単位で行うこと

- ◆ 母子保健対策を遂行するために必要な研修計画と予算の確保
- ◆ 研修
 - i) 専門性が高く、保健所またはブロック単位では開催困難な研修
 - ii) 行政が対策として実施する事業に関する研修
- ◆ 民間機関も含めた研修会開催情報の提供
- ◆ 視聴覚教育教材の確保と提供

(3) 国が行うこと

- ◆ 各都道府県における母子保健従事者への再教育の義務化
- ◆ 母子保健政策を遂行するための国レベルでの研修計画・実施計画および予算の確保
- ◆ 視聴覚機材の開発と情報の提供
- ◆ 母子保健教育のモニタリング

IV 勧告

1. 生涯研修の必要性の認識

（医学は急速に変化している。常に研修に努力しないと進歩がなく誤まりがそのままつづく）

2. 研修システムと予算の確保

3. 視聴覚教材の開発と有効利用（教育機会の均一化）

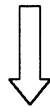
4. 生涯教育に関するニュース（情報）の発行と提供（FAX網などによる敏速な情報の提供）

5. 地域の実状に適した生涯教育のシステムづくり

6. 健診担当の医師が所定の研修を受け、かつ生涯教育をうけられるようなシステムづくりをする。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



- 要約:1.指導者用教育教材として「乳幼児健診の実際」のビデオを制作した
2.地域適合性のある教育システムの提言
3.教育システムを確立するための勧告